

な
も
な
も

寺
尾
久
継

はじめに

「なまなも」とは、何かの役に立とうと一所懸命努力して、その結果に「ありがとう」と言われたとき、「どういたしまして、気にしないでいいですよ」と言う福井県越前市西部地方の方言です。

長男である私が満六十歳になった平成十一年四月、田舎で元気に暮らしていた両親が、私の定年を待ちわびたように体調を崩し、介護が必要になりました。

私の妻が介護し、私が金曜日に帰郷し、月曜日田舎から出勤する生活が始まりました。

平成十三年九月に父が、十四年一月に母が他界するまでの間、田舎の親戚や近所の方々に大変お世話になり、「いろいろありがとうございます」とお礼を言いますと、「なまなも」とこたえてくれました。

この言葉の響きに美しさを感じました。そして、この言葉の生まれた集落の風土、背景や歴史を大切にしたいと思うのです。

寺尾 久継

はじめに 2

第1章 ふるさとへの思い 7

(1) 両親とふるさとへの感謝の芽生え 10

(2) 白山小野町の精神「なもなも」 11

(3) 白山小野町の精神を神山新小野^こにつなぐ 13

第2章 ダム開発などで集団移転した集落のその後 19

第3章 最初に最後を考える 25

(1) 計画は最初に最後を考えること 26

① 歴史が育んだ精神 28

② 畏敬の存在 30

③ 里地里山 34

(3) 三つの経済 40

① 貨幣経済 40

② 自給自足経済 41

③ ゆいの経済 42

(4) 可処分所得 43

(5) 賢い消費と考え方の転換 45

第4章 子育ては親育ち ・・・・・・・・・・・・・・・・

(1) 子供たちは家の宝、町の宝 50

(2) 大人とは 51

(3) 子供が大人になる道 52

① 収入増が可処分所得増にならないことに焦る 69

② うまい話に対する迷い 69

③ 妻に対する配慮 70

第6章 明るく楽しい新小野 73

(1) 好き嫌いや相性の善し悪しを乗り越えて、

誰もが居場所のある新小野 74

① それぞれの人の良いところを発見する 75

② 出る杭を伸ばす 75

③ 小さな声に耳を傾ける 76

(2) よいコミュニケーション 76

(3) 善の循環 79

表紙画／原下節子

ダムに消えゆく集落、小野町
(神明神社よりスケッチ)

第1章 ふるさとへの思い

(1) 両親とふるさとへの感謝の芽生え

私は昭和五十七年四十二歳で旧三和銀行の支店長に任命されました。一国一城の主になったわけです。それなりに嬉しかったのですが、用事で帰郷した折りに父母に報告すると父は大変喜んでくれて、ぽつりと「大学へ行かされずすまんだね」と言いました。私のふるさとでは長男が高校へ行くということは、農業の後継者を離脱することを意味したブーでした。私の白山中学校の同期は男性が四十人いましたが、高校へ入学したのはたったの五人で、長男は私を入れて二人でした。ですから、昭和三十一年に六人兄弟の長男だった私を高校へ行かせてくれただけで嬉しかったのに、この父の言葉にはびっくりしました。同時に、親の深い思いに感謝の念が芽生えました。

そして、十八歳で銀行へ入行してからの二十四年間を振り返ってみました。「ご家庭であれ会社であれお客様が良くなって初めて銀行もよくなる」という信念で、銀行で言いたいことを言えたのも、お得意様に自分の信念を語れたのも、自分の家族を何とか

守れたのも、いつでも帰れる田舎があっただと気づきました。もし、帰れる故郷がなければ、「長いものにはまかれろ」みたいな生き方になっていたのではないかと思ひ、ふるさとへの強烈な感謝の念を抱きはじめました。

それ以来、同じような集落に興味を持ち、万博やダム事業で補償金や土地代金を手にした集落やご家庭のその後の歩みを観察し続けてきました。

(2) 白山小野^{しらやまこ}町の精神「なもなも」

私のふるさととは、福井県の越前市にある小野^こという四方を山と川に囲まれた戸数二十四軒の小さな集落です。田圃は山と山の谷間に点在しています。

小さな集落の割には、小高い山の中腹に大杉のある立派な神明神社と金刀比羅さんがあります。毎年一月一日午前五時頃、父は私を連れて参拝しました。参拝ではほかの参拝者とすれ違つても無言で会釈するだけでした。村人同士の挨拶は神様への挨拶が済んでから



吉野瀬川

というしきたりがあつたからです。参拝を済ませ、家についてから家の中の神棚と仏壇に手を合わせました。その後「おめでとうございます」と家族に挨拶をさせられました。子供の頃の遊びは、神社の境内で「かけっこや肝試し」、川で「泳ぎや魚の観察」、冬は神社の階段で「竹スキー」など楽しい思い出ばかりです。泳ぎや魚の観察は私の得意技で、魚に「大将とか桜女王」などと名前をつけて大事にしていました。

平成十三年九月父が他界し、長男である私はふるさと小野へ移住しました。週二〜三日が大阪、四〜五日が田舎の生活です。

四十二年間離れていた田舎になじめるか心配でしたが、集落の人達はとても親切で、困って

いるときは助けてくれ、「なまなも」と言って気持ちよく受け容れてくれました。

平成三年頃から県のダム事業の話が出て小野の集落も集団移転を考えなければならなくなりました。以来十数年にわたって、補償金と生活再建について、「文化の継承」・「生活再建の知恵」・「正しい考え方」を学んできました。そして、平成十七年二十二戸の家と住民九十二名は集団移転を余儀なくされました。神社や金刀比羅さんやお地藏さんも移設しました。山間部の田舎から四キロ程町に近くなり、日当たりもよく、学校や買い物も近くなり、とても便利で生活も一変しました。

集落・小野の歴史を調べると、約一、五〇〇年前、継体天皇の関係者が拓いた長い歴史があることがわかりました。山と山に囲まれた集落と田圃、そして恵みを与えてくれる山、しかし、豪雨による河川の氾濫や山崩れの災害もあつたようです。

集落の神事は年四回の「祭り」、一月には「御日待」・七月には「虫供養」という宗教行事もあります。

このような環境と歴史の中で培われた集落の文化は、「感謝の心・助け合いの心・篤い信仰心（利他の心）」だと確信できました。小野の人たちは「なもなも」という言葉をよく使います。お世話になったり、お力を借りたとき「ありがとう」とお礼を言うのと、「なもなも」と言ってくれます。「いやいやどういたしまして」という意味なのですが、実に暖かみのある素晴らしい言葉です。「できる範囲で尽くして感謝されても、相手に負担を感じさせないように」「なもなも」と答えて生活をしよう、こういう心根が小野には息づいています。

(3) 白山小野町の精神を神山新小野につなぐ

この「なもなも」精神の伝承こそ小野町の文化の伝承だと思っています。新旧の小野町は、白山から神山へと地域が変わりました。田舎で地域が変わるということは大変なことです。変わってきた者は新参者になるからです。しかし、私たちは白山から神山へ変わっても「なもなも」精神を継承する限り新参者ではないと思っています。



林道の整備



桜の木、植栽の準備



農道の整備

私のような熟年者は、礼儀正しく神山地域に尽くすつもりでいます。会議があれば五分前には会場へ行き、地域の行事には率先して参加します。

私たちの次の世代には、神山地域の体育会や自警会での交流を通じて、新しい地域のことを理解するようにお願いしています。そういうことを前提にして、世の中の変化に合わせて新しいことに挑戦してほしいと願っています。

私たち熟年者は、人工林の手入れや混合林の森づくり、農地の保全、池や河川の管理を助け合って汗を流す姿を子や孫に見てもらうことを通じて、長い歴史か



ボランティア活動の集合

ら学んだ文化「感謝の心・助け合いの心・利他の心」を継承してもらいたいと思っています。

旧集落である白山小野には、山や農地や河川、稀少動植物、特にアベサンシヨウウ魚などが棲息しており、環境省から環境特区の指定も受けました。

小野の農地と水を守る組織を「なもなも会」と名付けましたが、この事業の目的は助け合って、農地や山や水を守ることなのですが、もう一つの目的は、一、五〇〇年かかってつくりあげてきた文化を次の世代に伝承することなのです。

第2章

ダム開発などで集団移転した集落のその後

私がふるさとへの感謝の思いを強めてから真っ先にしたことは、集団移転した集落の開発や農地を売却したその後を知ることでした。ふるさとの文化の継承と新しい地域における生活再建の知恵を探りたかったのです。そのいくつかをご紹介します。

○ダム開発で三十数戸が全戸集団移転した事例

集団移転は全戸がまとまり、紆余曲折はあったが補償金も何とか妥結した事例です。しかし、その後は各戸バラバラになったようです。特に、補償金の使い方が次のように四つくらいに分かれました。

第一に、補償金を自宅建設のための土地の購入や建築費用につぎ込んだ人々がいました。代替資産として税金がかからないというのがその理由です。

第二に、余ったお金で文化住宅の経営を始めた人々がいました。所得と投資を合算して節税ができるというのがその理由です。

第三に、ガソリンスタンドや飲食店の開業をした人々がいました。

第四は、子弟の教育資金として貯蓄をした人々が、僅かでしたがいました。

これらは集団移転した当初の世代がしたことですが、その次の子の世代は殆どがサラリーマンか個人事業主で、固定資産税や経営不振に振り回されました。そして、孫の世代になって相続放棄が起こっています。

○万博時代に道路開発で農地を売却した集落の事例

ある集落は、集落で相談をまとめて集落計画を練り、代替地に住宅と工場施設を区分して住みやすい地域になっています。神社には氏子と崇敬者の名札がかけられており、樹木の管理も行き届いています。歴史を知り尽くした、しっかりしたリーダーがいたことを感じさせます。

もうひとつの集落は、集落としてまとまらず、工場と住宅が混在して、何とも住み難いまちになっています。神社の樹木は管理されず、清掃も行き届いていません。この地域には博打打ちが狙いをつけて、農地を取られたような人もいたと聞きます。

○旧集落と代替地に集落が二分した事例

これは二十五〜六軒の集落なのですが、ダム地に残る人々と、代替地に移転する人々

に分裂した事例です。

ダム地残留組の人々は先祖代々の土地から「出たら滅ぶ」と思いこんでいたようです。移転組の人々は子供の通学や日常生活に不便というのが移転の理由のようでした。学校がダム地から遠くなることや共稼ぎで子供の送迎ができないという事情があつたようです。

いずれにしても何度も話し合いをしたようですが、一致点がみつからなかったようです。その後の状況は不仲です。不仲は物事がなかなか決まらないのです。集落の課題への取り組みや問題の解決を先送りされます。そして、集落は衰退していきます。

○ 集団移転集落の成否

集団移転をした後、その集落がまとまりを維持し、さらに住みやすいまちになるかどうかの境目は何でしょうか？ 私なりに考えてみました。

先ず思うことは、集落の歴史と文化の理解ではないかということです。つまり、集落を支えてきたものが何だったかという理解です。それは歴史が育んだ文化、精神的な拠

り所ではないかと思えます。人は独りでは生きていけない、みんなで助け合って初めて幸いになります。そういうことを共有できる集落はいろいろ議論はあってもまとまりません。

次に思うことは求心力のあるまとめ役、リーダーの存在です。これまでの事例で移転後のまちづくりや旧集落の対策がうまくいっていないところにはリーダーが不在でした。人間の本性が如実に現れるお金がからみますので、一致点をうまく作り出すリーダーがいるかいないかは決定的です。

更に、お金に対する考え方があり、消費する満足にとらわれない考え方ができるかどうかです。また、子弟の教育や家庭と集落の後継者育成という人に対する投資ができるかどうかです。そして償却という考え方も大切です。

第3章

最初に最後を考える

(1) 計画は最初に最後を考えること

計画というのは目標を、どんな方法や手順で達成するかを組み立てることです。しかし、殆どの場合目標を達成するところまでで終わります。本当はこれでは困ります。例えば、家の新築を考えてみます。新築して終わりにはなりません。築後何年目かに、屋根の葺き替え、外装、畳替え、内装のリフォーム、基礎の検診などが必要になります。五十年して改築するのか、建て替えるのかも問題です。家の解体には費用がかかります。新築のときにここまで考えるのが、最初に最後を考えるという意味です。



大竹藪

多分、「二十年もたったら俺は死んでいる、息子が考えればいい、俺がそこまで考えることはない」と言う方もいるでしょう。これでは親父の自慢は息子の負担になってしまいます。責



を考えないと大変なことが起きるのです。

(2) 新小野の生活再建を考える原点

小野という地名は伝説によると、遣唐使の小野妹子の一族小野媛がこの地に永住したのでつけられたといわれています。その小野媛の墓所と言い伝えられる五輪の塔跡が吉野瀬川の「大竹藪」にあります。

任の持てない計画になってしま
います。補償金で車や家財を買
い、豪邸を新築した結果、息子
の代に固定資産税に追われ、孫
の代には相続放棄なんていう悲
惨が待っています。最初に最後

① 歴史が育んだ精神

○村掟

村の共同生活について、助け合い、仲良く、楽しい村にするために、寄り合いできまりが決められていました。年貢の割り当て、道路修理、寺社の修理、清掃、用水管理、盗難予防、防火などについて細かいきまりがありました。

○村八分

村には相互扶助の助け合いの習慣があり、火災・葬式・婚礼・病気・元服・水害・旅行・出産・追善・普請など村十分のつきあいが行われていました。村掟を破ると村八分という火災と葬式以外はつきあわない制裁がありました。

○ゆい

短期間に集中する農作業を中心に、ゆいという均等交換のてまがえがありました。田

起こし・田植え・稲刈り・草取り・稲運び・薪運び・うすすり・屋根ふき・味噌かちなどです。ゆいで手間を借りるのをゆいがり、同じ条件で返すのをゆいがえしといったいました。

○講

頼母子講という救済制度があつて、苦境にある家を再興していました。一回目は掛け捨ての出資で、二回目からは金融講になつていたようです。

お金を出し合い共同購入を目的とした仲間講として、萱講・蒲団講・輪島講・瓦講などがありました。

伊勢参りを目的にした伊勢講は、代参者をお伊勢さんに参拝させ、お札やお守りを土産にもらい、サカムカエという精進落としをして楽しんだといひます。この類のものに、金刀比羅講・出雲大社講・本山講などもありました。

このほかに民間信仰の田の神や山の神の信仰もあり、子供達中心の地藏講もありました。

さらに庚申講といつて六十年ごとの庚申の年に庚申塚や庚申塔を建てたり、法華宗の

お日待講では一晩中お題目を唱えて一睡もしないものがありました。

○このような仕組があつたお陰で、助け合いと感謝の心が醸成され、定着したものと
思われます。

② 畏敬の存在

○神明神社

神明神社は天照大神を祭神とし、神像・観音菩薩・毘沙門天を神体とする旧指定村社です。吉野瀬川上流の集落の西端に、氏子全戸を見渡せる小高い山腹に北面して建立されてきました。境内は杉・櫟・紅葉・榊の大本が豊かな森をつくり、麗しく荘厳な靈気がありました。先人たちは国土の平安を願い、農業の発展を願い、そして北に住まう氏子の福徳を祈ったのです。

天照大神はイザナギノミコトの娘で、高天原の主神であり、皇室の祖神とされ、日本



旧 神明神社

の国家の神です。国家平安の神ですが、それ故に国の本である農、つまり、五穀豊穡の神とされます。

観音菩薩は観世音菩薩の略称で、大きな慈愛と慈悲で人々を迷いから解放し悟りを開かせる役割を持っているといわれています。勢至菩薩とともに阿弥陀如来の脇侍とされます。

毘沙門天は四天王と十二天と七福神の一で、多聞天ともいわれています。憤怒の相で甲冑をつけ、片手に宝塔、片手に鉾または宝棒を持つ北方の守護神です。

○ 岩山金刀比羅神社

金刀比羅神社は吉野瀬川を眼下に見下



旧 金刀比羅神社

ろす岩山山頂にあったものを、神明神社境内の小高い丘に遷座されました。岩山金刀比羅といわれる所以です。農業・水難・雨乞いの守護神である大物主大神を祭神としています。

○地蔵院

地蔵院は小野町の南端小野川の清流沿いにあります。ご本尊はお釈迦さんの付託を受けてその死後弥勒仏が現れるまでの無仏の世界で人々を導いた地蔵菩薩です。坂口の曹洞宗少林寺の末寺ですが、何故か尼僧が堂守で、尼寺あんでらの名で親しまれてきました。特に、甘茶まつりとおみまき団子は子供たちの大きな楽しみで



金刀比羅祭り

した。しかし、二十軒ばかりの集落のお布施では成り行かず、尼僧は七十軒強の集落・若狭へ移住しました。

○先人たちはこれらの畏敬しひれ伏す存在である神社仏閣が鎮座する緑の土地を良き住処と定め、並々ならぬ苦勞と英知により田畑を開発し山林を開き、深い信仰心に支えられてお互いに強い結びつきを深めていったのでしょうか。そして、多くの問題と困難に立ち向かいながら、心を合わせ力を集めて香り高い文化と伝統を育み継承してきたのです。

ダム事業のために、文化と伝統のある思い出深い故郷を断腸の思いで去ること

になりました。神明神社と金刀比羅神社も、新しい土地に氏子とともに遷座しました。私たちは先人たちが長きにわたって育んできた文化と伝統を正しく理解し行動し伝承していかなければならないと思います。

③里地里山

○大正五年の白山村土地台帳によると、全二十四字に占める小野の地目ごとの面積とその構成比は次のようになっています。

田	・ ・ ・	一七六反四畝（四・五％）
畑	・ ・ ・	三五反六畝（四・八％）
山林	・ ・ ・	一四〇七反（一一・九％）
原野	・ ・ ・	八反三畝（一三・四％）
雑種地	・ ・ ・	二反九畝（二・八％）
宅地	・ ・ ・	三八九六・八坪（五・六％）



小野町の里地

こうしてみると、原野と雑種地と山林の構成比が二十四の字の中では非常に高いことがわかります。とりわけ山林は最高で、一軒当たりの所有面積は白山村中最大でした。小野はいわゆる旦那衆の集落だったのです。しかも、山峡の地で夜明けが一時間遅く、日暮れが一時間早かったといえます。他の集落の人々は小野は娘を嫁にやりたいところであり、小野は実際嫁に困らなかったそうです。働く時間が他の集落より二時間も少ないわけでおイコト（苦勞）が少なからうという親心が働いたのでしょうか。

○明治十八年の白山村の産物は次のとおりです。

米・・・三八一四石

麦・・・一八八石

きび・・・一五三石

そば・・・二二石

粟・・・二五石

大豆・・・六二石

小豆・・・二五石

甘藷・・・三五〇〇貫

柿・・・九〇〇貫

麻・・・一五〇〇貫

馬鈴薯・・・二〇〇〇貫

こうぞ・・・三五〇〇貫

茶・・・四五〇貫

畳表・・・三五〇〇枚

繭・・・七〇〇貫

板・・・四〇〇〇〇枚

木実・・・三〇〇

瓦・・・九〇〇坪

藺草いぐさ・・・五五〇貫

○明治末期と昭和五十三年の白山村の生業は次のようになっていました。

明治末期

昭和53年

養蚕

一二三戸

〇戸

炭焼

五二

〇

木挽

四九

〇

大工

一九

二二

左官

五

八

鍛冶屋

六

一

酒造

六

〇

商店	一〇	一三
土方・運送	二〇	一二
生産工場	二三	一八
純農家	二四八	二〇
兼業農家	二三六	四三六

○小野は勿論、白山村全体が周囲を山で囲まれた盆地なので、他村との交流には山越えが必要でした。当然のことながら、村人は農林業を軸に自給自足の生活をしていました。農業といっても、当時白山の耕地は四〇〇町歩、農家は六〇〇戸でしたから平均すると一戸七反歩です。生活は苦しかった筈です。明治以後は花筵業や薬工品の産業開発が進み一時成功を収めました。現在は衰退してしまっています。冬季に毎年二五〇人以上が関西方面へ杜氏の出稼ぎに出て生計を補っていました。道路や交通手段が整うにつれて今では杜氏の出稼ぎがサラリーマンに変わり、その収入が第一位になっています。

○今、世界は各国の協調が大切といいながら、核兵器の拡散に見られるように軍事力を背景に、石油や天然ガスの取り合い、稀少金属の独占などナショナリズムが強まっています。今後予想されるのは食糧を背景にしたナショナリズムです。日本はカロリーベースの食糧自給率が四〇%弱です。世界的には8億人分の食糧が不足しています。日本に何らかの理由で食糧不足が生じる可能性はゼロではありません。むしろ、六〇%以上を輸入に依存する日本ですから、どこかの国が輸出を止めればたちまち食糧パニックが起こっても不思議ではありません。

新小野という二十二戸・九十二人乗りのバスは、前を向いて前進しなければなりません。状況に応じて小野の里地里山までバックできるバスにしておかなければなりません。小野の里地里山は、米三〇〇俵に雑穀、根菜や葉菜、山芋、冬の暖房用樹木もあります。あとは小魚と塩があれば最低生きていきます。この幸いを大事にしたいと思います。

(3) 三つの経済

今、経済はひとつしかないと思われています。貨幣経済です。しかし、小野の歴史をみても経済は複数あったように思えるし、哲学者の内山節という人は三つあると言っています。

① 貨幣経済

貨幣経済というのは貨幣が単純な交換財だという意味ではありません。貨幣が最初にあつて最後まで貨幣という仕組になつていくということです。商品の生産やサービスの開発が最終目的ではなく、それらは貨幣増殖の手段なのです。例えば、バブルの時を考えてみましょう。企業は独自の商品やサービスではなく、株や不動産やゴルフの会員権などに投資しました。何故、そんな投機をしたかということ、貨幣を増やすためです。貨幣が増えるなら、商品やサービスを売って利益をあげることに限らなかつたのです。

また、今盛んに問題になっている企業の不正も同じことを意味しています。医療や介護や福祉でさえ命よりも貨幣が重視されて不正が行われています。

更に、地球温暖化という政治問題も人類が滅亡するかもしれないというのに貨幣の増殖という立場から消極的な扱いしか受けません。

このように現代は貨幣経済一極の時代です。そして、この事態が人々の心の荒廃を招いています。しかし、小野の歴史を振り返ると、多様な経済と豊かな心が見えてきます。

② 自給自足経済

小野をはじめ白山村は外部と遮断された山峡の地で、農林業を生業として自給自足していました。決して豊かではありませんでしたが、明治の初期ぐらいまでは集落や村の単位で自給自足ができていました。衣食住のすべてを自分の手で賄っていました。不足するものがあると、集落や村の範囲で物々交換や交換財としての貨幣を使って手に入れました。この場合の貨幣は単なる交換財ですから増殖する貨幣ではないわけです。また、相手が作っていない作物を贈答しあうという習慣もありました。

こういうことを含めて自給自足という仕組は明らかに経済でした。現代は集落や村という共同体がなくなってしまう、自給自足経済が姿を消した時代です。しかし、貨幣は人を狂わせます。そればかりか生活を考えると貨幣だけでは成り立たないことがたくさんあります。

③ ゆいの経済

ゆいというのは助け合いです。小野にはこのゆいがありました。元々ゆいは農作業から始まりましたが、次第に生活全般に広がりました。ゆいは「てまがえ」といつて、均等交換でした。手間を借りると「ゆいがり」といい、同じ条件で手間を返して「ゆいがえし」といいました。例えば、屋根ふきを半日してもらうと、同じように半日の屋根ふきをして借りを返したのです。この助け合いというのも重要な経済です。これも共同体の崩壊とともになくなってしまうました。しかし、助け合いがあつて初めて、生活がしやすい、温かい心が育つのも真実です。

三つの経済はみな必要ではないかと思えます。三つの経済が補い合うことで心豊かな生活を創造することが出来ます。貨幣経済一極の矛盾が、改めて自給自足やゆいの経済を求めはじめていともいえます。田舎暮らしや農業回帰や市民農園、地域通貨やボランティア活動などにそれを垣間見ることが出来ます。小野の集落には三つの経済がありました。それが小野の「なもなも」という文化を生んだのではないかと思えます。あるいは「なもなも」という文化が三つの経済を育んだのかもしれない。

(4) 可処分所得

経済の国際化は進むでしょう。これは仕事が賃金の安いところへ移動するということです。今、日本で販売されているモノのラベルを見るとよくわかります。中国や韓国、それにほかの東南アジアの商品がどんどん増えています。ですから、特殊な知識や技術を持つ人以外は大幅な賃金の上昇を望めません。

CO₂排出量規制など自然破壊抑止の動きが、かつての高度成長を制約します。ただ、日本の省エネ生産システムやエコ自動車やエコ器具などで付加価値の高いモノは成長する可能性があると思います。

少子高齢化によつて働く人々の負担が増大します。税金や社会保険料などの料率が間違いなく上がるからです。

年金の支給開始年齢が六十歳から六十五歳に引き上げられました。現役収入比支給率が六五%程度から五〇%程度に低下します。

集団移転した私たちには、これから固定資産税と保険料の増加が予想されます。

これらの事情を合わせ考えると、私たちが自由に使える所得、つまり、可処分所得は間違いなく減ります。経済の国際化により物価の上昇は抑えられていますが、一方では国や地方また行政の關係するセクターなどの借金が一、〇〇〇兆円もあります。国民一

人当たり八〇〇万円以上なのです。権力機構が借金を楽にする一番手っ取り早い方法がインフレ政策ですから油断できません。インフレに弱い預貯金や年金は常に危うい状況におかれています。

(5) 賢い消費と考え方の転換

無駄な消費はないでしょうか？ 交際費に見栄をはっていませんか？ 無駄は省く方がいいに決まっています。

「償却」という考え方を頭に入れておく方がいいと思います。償却というのは、正確には減価償却です。建物でも車でも、使えば使うほど、時間が経てば経つほど値打ちが下がります。毎年、この下がった値打ちを費用として取り扱うことを減価償却といいます。私たちの生活でも償却という考え方がとても大切だと思っています。

例えば、農機具ですが、田植機や耕耘機やコンバインは中古品でも合計一、〇〇〇万

円くらいします。十年で使えなくなるとしたら、毎年一〇〇万円使ったことにして蓄えておかないと買い換えの時が大変です。

あるいは、四、〇〇〇万円で家を新築したとします。八十年の耐用期間があるとしたら年に五〇万円貯めておかないと建て替えができない心配があります。

また、車を五台八〇〇万円で買ったとしますと、八年で買い換えるなら年に一〇〇万円使ったことにして用意しておけば買い換えが楽だということになります。

新小野へ神社や公民館を移設しましたが、この償却も考えなければなりません。神社の屋根は銅板にしましたが、銅板だけ考えても比較的早い時期に葺き替えなければなりません。

償却費というのは、農機具や家や車に現金で出費する燃料・修理・保険・税金とはまったく別の費用です。購入代金や維持費はお金の収支だけで払って終わりですが、償却費は払って終わりにならないお金です。従来の現金収入は給与に頼っていましたが、ダム の補償金がまとまって入りました。全部何かを買うことにあててはいけないと思います。余計なモノは買わない、必要なモノを買うなら償却を考えて買うということが必要だと思っています。一家の経営が大事だと思います。

私は消費することに満足がありません。むしろ何かに尽くすことに喜びを感じます。これは年齢だけのせいではないと思います。消費というのは費やして消すことです。使つて無にすることです。どこかに空しさがあります。モノは持つほど欲しくなりますし、持ったときから古くなります。そして飽きがきます。消費は満足を生まないという性質を持っているでしょう。

ところが何かに尽くすとか、誰かの役に立つということは、それが無心であれば感謝してもらえますし、好ましい関係が生まれます。いい循環ができます。

人間は何か意味のある役割を持つてこの世に生まれてきているのでしょうか。自分の役割が解つていて、それを行うことができれば自分も満足できます。それが誰かの役に立つことなら、喜んでもらえます。

尽くすということは小野町が築いてきた文化、「感謝と助け合いと利他」という「なもなも」の精神にも一致します。自分の幸せよりも、みんなの幸いを優先する、みんなの幸いの中に自分の幸せがあるという考え方なのだと思います。現代の流れは自分の幸せ最優先ですが、これが世の中を狂わせている根本なのだと思います。

仏教はお釈迦さんが説いた「今を正しく生きる教え」です。お釈迦さんの後、いろんな変遷があつて今では葬式仏教などといわれていますが、元々の生き方の教えには立派なものがあります。私たちの小野の文化に通じることもたくさんあります。

そのひとつに、良い種を蒔けば良い結果が生まれ、悪い種を蒔けば悪い結果が生じるという教えがあります。過去に蒔かれた種が現在に、現在蒔かれた種が未来に、それぞれ芽を出します。蒔かれた種は一旦蔵に入つて、ご縁によつて現れて芽吹くといわれています。ご縁は自分であり、子供であり、孫だとされています。これを因果応報といっています。

悪い種というのは殺生・盗み・悪口・陰口・妬み・嫌うことなどです。良い種というのは、自分のことを忘れて自分以外の他のことに尽くすことです。家族に尽くす、地域の子供たちや高齢者に尽くす、お寺や神社を大切にする、里地里山を守り育てるなど、良い種を蒔くことはたくさんあります。小野の「なまなも」ということばにはこういう意味がこめられていると思います。

第4章 子育ては親育ち

(1) 子供たちは家の宝、町の宝

子供たちはご両親やご家庭の宝であると同時に、新小野の宝です。都会では子供たちは家の宝ではあるかもしれませんが、町の宝とはいえなくなっています。地域のまとまりがなくなっているからです。しかし、小野は昔から子供たちを集落の宝として大切に見守ってきました。今でもその文化は引き継がれています。

通学送迎のボランティア、交差点の誘導ボランティアをしている方々があります。ボランティアが出来ない方々は子供たちを見たら顔をあげて声をかけるようにしようと話し合っています。

新小野での子供たちの遊びは、吉野瀬川の川辺での遊び、神社の欄干にぶら下がる遊びなど結構危ないことがあります。冒険心が欠けてしまうような注意はしないようにしようと話し合っています。自転車遊びは車が心配なので、町内での車のスピード厳禁を呼びかけています。

(2) 大人とは

大人と子供の違いは何かというと、大人は良い種を蒔く人だと思います。自分以外の他のために尽くすという役割意識を持っている人が大人だと思います。

子育てというのは子供が良い種を蒔く人間になるように導くことだと思います。しかし、これは言うは易く行うは難い難事業です。特に、男は仕事を口実に子育てを妻任せにしてきました。自分の生き方で子供に向き合っていなかったのです。特に、私のような六十代の男はそうでした。しかし、小野でも七十代の方々は、男も子供に向き合って、ご自分の生き方をしっかり伝えてきています。ですから、律儀だし、義理堅い方々が多いのだと思います。逆に、昭和二十年以降の方々は親子が友達関係のようで、これは向き合っているようで、そうではないのかもしれませんが。ですから、親子よりも祖父母と孫が向き合って影響を与え合っているようです。特に男の孫たちが祖父の影響を受けて成長しているように見受けれます。

(3) 子供が大人になる道

今は成人式というのがありますが、これは単に二十歳になったお祝いのような面が強く、大人への試練にはなっていないように思います。しかし、かつては小野にも手伝いという子供が大人になっていく試練の場がありました。それは先ず、農作業や薪割など家の仕事の手伝いでした。そして、もうひとつが祭りや道普請など集落の仕事の手伝いでした。大人がしている仕事を任せてもらえるようになって大人仲間入りができました。

男の子は主に祭りの手伝いを通じて集落の仕事を身につけていったように思います。年上の子供が年下の子供に対して神社の縁の下で肝試しなどをするという風習もありましたが、これなども大人へのある種の試練だったのでしょうか。

女の子は主に躰教育だったのでしょうか、奉公に出されました。これが大人の女への試練の場だったように思います。

そのほかに寺子屋がありました。白山にも二階堂、萩原、菖蒲谷、丸岡などに家塾が

ありました。村の若者は農閑期になると寺子屋へ通い、読み、書き、そろばんを習っていました。この寺子屋も子供にとっては大人へのひとつの道だったように思います。

(4) 親の役割・集落の役割

子育てには当然ですが親の役割があります。しかし、同時に子供は集落の子でもありますので集落としての役割もあります。

親の役割は実は両親が家族の変遷とともに進化することだと思います。つまり、両親は結婚して個人としての男女から家庭を持つ夫婦になるわけですから夫婦の役割を持ちます。子供が産まれると親子という役割が加わります。保育園・幼稚園・学校との関係では父兄という役割があります。同時に地域との関係では共同体員という役割があります。

集落の役割は地域共同体の秩序の維持や伝承を通じて、よりよい共同体の成員を育成することだと思います。

① 体づくりと食事

健全な体づくりは親の役割です。

地元で採れる旬の食材をまるごと食べることが最もいい健全な体づくりだと思います。

「地元で採れるもの」がいいのは、人間の体が地元の気候風土に適応しているからです。人間が食べる動植物も地元の気候風土に適応しています。地元で採れるものが体に一番合っているのです。難しく言うと身土不二です。体と土はふたつにできない、一体のものだというわけです。そんなわけで地元のを地元のを地元で消費しようという地産地消運動が起こっています。

「旬」は、野菜でいえば完熟するとき、魚でいえば産卵期です。最も栄養がある時期を旬といいます。旬のものを食べるのが一番体にもいいのです。

「まるごと」というのは、部分だけ食べるとバランスが崩れます。野菜も魚もそれぞれひとつのものとして調和しています。調和しているものを食べるのがいいのです。です

からマグロのトロよりも小魚をまるごと食べる方が体にはいいということです。

これを一物全体といいます。

食事は元々医療と同じであるといわれ、医食同源という言葉があります。食事も医療も健全な体をつくるものであって、根本は同じだということです。正しい食事によつて医療のいらない健全な体をつくることができるし、病氣は正しい食事で治すことができるというわけです。

正しい食事というのは、地元で採れる旬のものをまるごと食べるといことなのです。が、実はこれがおばあちゃんの味、おふくろの味なのだと思います。ですからこの伝統の味を大切にして引き継いでいくことが必要だと思います。小野に伝わる伝統の味を家庭は勿論ですが地域をあげて伝承していききたいものです。ちなみに、大柳末子さんに教えていただいた小野の伝統の手料理には次のようなものがあります。家庭では勿論ですが、冠婚葬祭の手料理にもよく使われます。

平こんにやくの刺身・からし酢味噌かけ

麩ときゅうりの辛子和え

大根のエゴマ和え（味噌味）

きんぴらごぼう

赤ずいきのすこ

ぜんまいの和え物（木綿豆腐または揚げとの味噌和え）

大根と人参の和え物（木綿豆腐または揚げとの味噌和え）

丸ごとナスの炒め煮

豆腐の冷や奴

煮豆

野菜と厚揚げの煮物

ほうれん草のゴマ和え

蕪と赤蒲鉾ときゅうりのサラダ（お祝い用）

ピーマンと竹輪の風味和え

漬け物・・・スイカ、みょうが、菊芋の粕漬け、季節の野菜

梅干の天ぷらのお吸い物

赤飯

ちらし寿司

② 躰しつけ

躰とは礼儀作法を身につけるように導くことですが、これも基本は親の役割です。

毎日の生活の中で親が身をもって示して教えなければ身にはつきません。小野には「感謝と助け合いと利他」という素晴らしい文化があります。これを伝えていくことです。多分、小野のこの「なまなま」の精神がわかれば、子供たちの挨拶と立ち居振る舞いが立派になる筈です。

家族であれ他人であれ顔を見たら朝昼晩の挨拶をする、食事のときには「いただきます」「ご馳走様」と挨拶する、お世話になつたら「ありがとう」・感謝の言葉を聞いたら「なまなま」と挨拶をする、これが当たり前前にできることがとても大切だと思います。親ができていないと子供には伝わりません。子育てが親育ちといわれる所以です。

挨拶ができるということは立ち居振る舞いがいいということにつながります。基本は真つ直ぐに立つことです。背筋を伸ばして、みぞおち鳩尾を上へ引き上げて立ちます。真つ直ぐ

立つた姿をそのまま平行移動させる歩き方がきれいな歩き方です。そして、真っ直ぐ立つた姿を垂直移動させればきれいな座り方ができます。これも親が日常的に示していることが大切だと思います。

③ 知識・技術の教育

親が行うべき知識や技術の教育があると思います。かつて農林業が生業だった頃はまさにこれに関する知識と技術は親が子供に修業させました。今はもう殆ど姿を消しています。

それでも、親が働く姿を子供に見せるという教育はあると思います。例えば、ダム建設後も小野に残る里地里山の保全・育成に汗を流すわれわれ熟年者の姿をみてもらうことはできます。また、小野の長い歴史とその文化を守ってきた祖先に感謝し、助け合って生活するという生き方の品格を磨く姿もみてもらえます。

さらに、「まあまあ」「そこそこ」「辛抱できて真面目」という平等主義の時代は去り、格差時代に入っています。その分何かひとつ「キラリ」と光るものを持つことが大切に

なっています。そのためには子供の夢をしっかり聴いて適えてあげることと必要だと思っています。自分が決めたことは一心不乱に努力してつかみ取る筈だからです。それに、子供の潜在能力をみつけてあげることが求められます。子供の秀でているところ、優れているところを認めて尊重してあげることが大切になります。

地域としても考えなければならぬことがあります。学校や塾やクラブを通じて身につける知識・技術があります。

危険なことや悪いことをみつけたら親切に注意することが必要です。親切にというのは、親しみを切り本人に愛情をこめて注意することです。

そして地域が子供たちの知識や技術の修得を応援してくれている、見守ってくれているという空気を伝えることも大切だと思います。

④ 安全の確保

親にとっても欠かせない役割ですが、地域内の安全については集落の役割が重要です。子供たちのさまざまな生活場面についてきめの細かい対応が必要です。親たちばかりで

なく、地域共同体員全員の協力が求められます。

⑤ 心の教育

子供の成長にとって、健全な体を鍛え、しっかりと知識・技術を身につけることが大切ですが、さらに大切なことは健全で豊かな心を育てることです。

両親をはじめとする家庭の愛情が最も重要だと思っています。しかし、集落の役割も欠かせないと思います。それは、いろいろな分野のリーダーが輩出される地域には特徴があるからです。「国家の品格」を著した藤原正彦氏は、その地域の特徴として三つあげています。

第一は、歴史と伝統があること。

第二は、頭を下げる、ひれ伏すものがあること。

第三に、美しい自然があること。

私たちの集落新小野にはこの三つの要素があります。

先ず、歴史と伝統ですが、継体天皇の皇女が集落を拓いて以来一五〇〇年の歴史の中

で「感謝と助け合いと利他」の伝統が根付いています。

そして、ひれ伏す存在といえ、神明神社・金刀比羅宮・六地藏・地藏院がすぐに思
い浮かびます。

さらに、美しい自然はまさに小野の里地里山です。

小野には各界のリーダーを育む素地があります。問題は、われわれがその要素を我が
身につけ、実践し、伝承する姿です。ここに子供たちの心の教育の原点が潜んでいるよ
うに思います。

私はこれらを示す次のような典型的な集落の行事を大切にしたいと思っています。

○四大祭り

春祭り：：四月に行われます。以前はこの日を昼寝初めとして昼寝を始めたそうです。

金刀比羅祭り：：七月十日に行われる水の祭りです。

秋祭り：：十月に二日間収穫を祝って行われます。本祭りといわれています。

以前はご馳走をつくり、お嫁にいった娘が子供を連れて里帰りしたものです。

後祭り：：秋祭りの一ヶ月後の十一月に行われます。



自然観察会



虫供養

○虫供養

農作で駆除された害虫の供養をします。七月の海の日に行われます。この日に子供たちの自然観察会が行われます。午前中はビオトープの観察会を行い、お昼は焼き肉パーティ、そして午後虫供養に参加して、焼香をし、僧侶の子供向けのやさしい法話を聞きます。



お日待

○お日待

昔は二月七日、集落の厄年者と家屋の新築者が宿主となり、祭壇を作り、天照大御神を祀り、鏡餅・御神酒を供えて、家主全部が集まって会食をし、夜を徹しました。

最近は一月初めの土曜の夜から日曜の朝にかけて、公民館で家主全部が集まり、祭壇を作り、会食をし、夜を徹して本音で話し合います。お日様が上がる頃、神事を行い、厄払いをします。

第5章 後継者と墓守

(1) 家族とは

家族とは何でしょうか？今は家族といえば夫婦と子供というのが常識のようになっていますが、私はこのような核家族だけが家族ではないと思っています。祖父母も曾祖父母も、もつと前の人たちも家族だと思います。そして実家などを含めて親類や縁者も家族です。従兄弟会などが増えているようですが、これも家族です。家族というのは縦にも横にも広がりをもった血縁です。

(2) 祖先とは

それぞれの立場から家族を縦に遡ると、そこに祖先の系譜があります。例えば、両親だけを遡ってみましょう。十代遡ると一、〇二四人になります。二十代だと一〇四万人、そして三十代遡ると一〇億人です。何と凄い数でしょうか？ みんな親類です。

自分は家の何代目なのでしょうか？ 意外とはつきりしないようです。しかし、新小野の将来はそれぞれの家の何代目かの後継者にかかっています。

私は三十～四十年前にダム事業で集団移転したいくつかの集落に興味を持ち、二十年ほど前から五年に一度訪問してお話を伺ってきました。伝統行事を継承し一軒も脱落していない集落には今も活力があります。伝統行事をやめてまとまりを失い、歯抜け状態になった集落は見る影もありません。集団移転後三十年のこの違いは一体何でしょうか？ 私は、集落の歴史・文化・伝統、家と祖先の継承に心を致したかどうかではないかと思っています。

(3) 後継者の役割

① 親の家としての家庭の経営

家計をキッチンとして、子供を育て、老後の心配がないように蓄えができればいうこと

はありません。しかし、後継者にはこれ以外に、親の介護、法事、親類とのつきあい、地域の仕事など「親の家」として「家庭を経営する」という働きが期待されています。

② 伝承

後継者にはさらに伝承という役割があります。それは家訓や戒めや家族の伝説・伝統を子々孫々に伝えていく仕事です。法事は家族の伝統を確かめ、自分を見つめ直す機会です。俗に墓守といいますが、過去帳に戒名だけでなく本名を記載して伝え残すこと、家族の伝説や伝統を記録して伝えること、こういうことが墓守の仕事ではないかと思っています。例えば、夫婦の両親と祖父母、合計十二人の祖先がどんな生き方をしたのか知るのは大きな学びです。苦労したこと、失敗したこと、残した業績などからたくさんのがが学べる筈です。このような学びから自分の生き方や目標を定めることがとても大切だと思います。そういう姿を子供たちや孫たちに見せることが墓守の役割だと思います。勿論、お墓を掃除したり、花を供えたりすることは当然のことです。

(4) 後継者の陥りやすい誤り

① 収入増が可処分所得増にならないことに焦る

ダムの補償金が入っても可処分所得は増えません。自由に使えるお金が増えないことが焦りを呼びます。

② うまい話に対する迷い

小豆相場、金相場、株式投資、投資信託など、うまい話が入りこんできます。元本保証のない、リスクのある商品の売り込みです。うまい話には乗らないことです。

商品相場には手を出さないことです。

株の投資はするなら限度を決めてすべきです。例えば、五年くらい必要のないお金の三分の一までというようにすべきです。そして、当の会社の製品やサービスを熟知し、

経営姿勢や社内ムードを理解することが肝要です。うわさや証券会社のお勧め銘柄で失敗する例は結構あります。

資本を出し独立して経営する起業の話も舞い込みますが、思いつきで始めると必ず失敗します。代理店などのうまい話はまず駄目です。起業するなら、最低5年くらいは構想を胸に秘め、勉強をし、修業から始めることです。そして起こす事業の最後、つまり、辞める段取りまで考えておくことです。

③ 妻に対する配慮

後継者としての役割を果たすには妻の理解と支援が絶対に必要です。妻の支援なしではできません。

妻や子供のために、真面目に一所懸命努力しなければなりません。

そして、感謝を忘れないことです。「言わなくてもわかっているだろう」と思いがちですが、はっきりと言葉にしなければ感謝は伝わりません。私はこれでいつも失敗してきました。

さらに、妻の周辺、妻の両親や兄弟姉妹を大切にすることです。

失敗について少し臆病な話になってしまいましたが、本当の知恵は失敗の経験から身につくものです。人に言われて身につくものではありません。ただし、その知恵はどれだけ一所懸命考え、努力した上での失敗かにかかっています。チャランポランで失敗しても、何の知恵も身につきません。最後に、失敗するかもしれないと考えて、事前に失敗の限度を決めておくことが大切です。

第6章

明るく楽しい新小野

明るく楽しい集落づくりは、一般の家庭と同様、奥さんが明るく楽しいことが大事だと思います。人間社会、好き嫌いや相性の善し悪しがありますが、それは人間の本性だから仕方がないと諦めるか、考え方を変えれば乗り越えられるのか、どうでしょうか。会社であれば、係の変更とか、定年とか、転職とかができますが、新小野という集落で生まれた、または新小野に嫁いでこられた方は、基本的に死ぬまでおつきあいがあります。ですから、諦めずに乗り越えなければなりません。

最近、学校内でのイジメの報道が多いですが、イジメとは何でしょうか？ 私はイジメは基本的にその人の存在を無視し、その人の居場所を無くしてしまうことではないかと思っています。

(1) 好き嫌いや相性の善し悪しを乗り越えて、
誰もが居場所のある新小野

「居場所がないのは本人の努力が不足しているからだ」と言ってしまうは簡単ですが、お互いの努力が必要だと思います。次のことに留意したいと思います。

① それぞれの人の良いところを発見する

人には良いところ、得意なところ、上手にできることが必ずあります。そういうところを発見し、認め合うことがとても大切です。悪いところは見つけやすいですが、良いところをみつけられる人は器量の大きい人だと思っています。

② 出る杭を伸ばす

「出る杭はたたかれる」ことになっていますが、新小野のためには、特に若い人の「出る杭は伸ばす」ようにしなければなりません。若い人の新しい、革新的な考え方や価値観を大事にしていかなければ新小野の発展はありません。新しい考え方を歴史や伝統の教えを否定するものととらえずに、それらを根っ子に据えながら受け容れていく度量が

必要だと思っています。変化のない従来のしきたりや安定を壊されるのが怖くて、新しいものを否定しないよう心がけることが必要です。

③ 小さな声に耳を傾ける

たまにしか発言しない人の意見は良く聴かなければなりません。そういう人の意見には万感の思いが隠されている筈です。かつてアメリカ・インディアン酋長の、全員の発言が終わるまで絶対に口をはさまなかったといわれています。

(2) よいコミュニケーション

コミュニケーションは伝え合いといわれることが多いですが、実際には分かり合いだと思います。お互いに分かり合っていることが多いほど関係が親密になります。そのためにいくつか大切なことがあります。

① 経験を共有する

同じ経験をするとよくわかりあえるものです。ですから集落の行事などには積極的に参加する方がよいと思います。

② 全部聴く

人の話は最後まで全部聴くことだと思います。聴いてもらうことで安心が芽生えます。聴くほどにわかります。話し手にも聞き手にもいい関係が生まれます。

③ 違いを受け容れる

意見や立場が違っても否定せずに受け容れることが大切です。実際、違いは枝葉末節のことが多く、共通点に本質があります。共通点を探すということが大事だと思います。

④ 遠慮ではなく配慮を

遠慮は思いを遠ざけます。配慮は思いを配ります。例えば、相手に忠告すべきことがあるのに、これを言うと恨まれる嫌われると思って忠告をやめるとします。これが遠慮

です。

ところが、お互いにわかり合っていることが多いと忠告はしやすいし、受け容れやすくなります。相手の長所を知っていて忠告する場合もうまくいきます。ですから一つ忠告したければ三つ誉めることが大切です。さらに相手に対してもっと素敵な人になってほしいという思いが強ければ、そのときの忠告もうまくいきます。

忠告の場所と時も大切です。恥をかかせないということです。みんなの前でなく、本人だけの場所と時を選ぶということも大切です。

ただ忠告ではならないことがあります。それは短足とか、鼻が低いとか、本人の努力で改善できないことはしてはいけないということです。

⑤ 悪口・陰口を言わない

悪口や陰口は人の成長や挑戦意欲を殺ぎます。明るさや楽しさもなくなります。異質の意見や改革的な考えも出なくなります。

⑥ ルールやマナーを大切にす



新しい神明神社

会ったら挨拶をする、ゴミ出しのルールを守る、ゴミ当番はゴミステーションの後始末をキチンとする、集会・共同作業に欠席する場合や遅れる場合には担当者に連絡する、会合や行事には5分前に集合する、ほかにもあるでしょうが、細かいことを間違いないで行うことは大切だと思います。

(3) 善の循環

神明神社の境内にある金刀比羅さんは水の守り神です。一滴の水はすべての命を育み支えるという強い意志をもって、



新しい金刀比羅神社

方円の器にしたがい川となり海に向かいます。

一滴の水は、山の樹木や動植物を育て、河川となつて平地の稲や野菜を育み、やがて大河となつて命の母なる海に至り、蒸発して雲となり雨となつて大地に戻ってきます。その間、幾多の障害を乗り越え、方円の器に従つて黙々と働いています。これを善の循環というのだそうです。

私たち人間もたくさんの祖先と自然のお陰で命を授けられ、個体は必ず死ぬわけですが遺伝子は子々孫々に受け継がれて種として存続します。水のごとく善の循環をしています。



移設された地藏さん

小野町はダム事業のため新小野という
便利なところへ集団移転しました。私た
ちは小野町一五〇〇年の歴史から得た教
訓、「感謝の心・助け合いの心・篤い信
仰心(利他の心)」を根っ子に据えながら、
新しい環境で新たな歴史を創っていか
なければなりません。もし小野町の歴史の
教えを忘れ、小野町の里地里山を棄てる
ことがあるなら、新小野の生活再建はあ
りえないでしょう。

新小野の老人会「おたっしや会」のみ
なさんが、集落の公園と公民館の周囲の
草抜きをしています。『ご苦労さん、あ



おたっしゃ会で草抜きした公園

りがとう」と声をかけると、「なもなも」と返事が返ってきます。

私たちは、ふるさと小野町の歴史と文化と伝統を学びながら、新小野の生活再建に取り組み、新しい生き甲斐を手にしようとしています。ここにも善の循環が生きています。

おわりに

私は一時期の繁栄や贅沢よりも、末永い持続的な継続を大切に思っています。

ダム事業による補償金というお金よりも、長い歴史が育んだ文化を大切にしたいと思っています。

今後、地域に期待される課題はたくさん出てくると思われます。例えば、里地里山の保全力やブランド力、地域の安全と防災力や防犯力、また地域介護力やゴミ分別、そして地域の教育力などです。

これらの課題をこなしていく力の源泉は、私たちの祖先が長い期間に育んだ文化「なものなものの精神」だと思います。

新しい課題を達成しようとするとき知恵が必要です。そして産みの苦労が必ずあります。産みの苦労を乗り越える源泉は「感謝の心・助け合う心・利他の心」、すなわち「なまなもの心」です。

「なまなもの心」をしつかり継承し、経済や政策や社会の変化に柔軟に対応していくことが新小野の幸いにつながると信じています。

寺尾久継の経歴

昭和 15 年 4 月 12 日、福井県丹生郡白山村小野（現在、福井県越前市小野町）生まれ。

昭和 34 年 3 月、福井県立武生高等学校卒業。

昭和 34 年 4 月、三和銀行（現在、三菱東京UFJ銀行）入行。

平成 7 年 12 月、三和銀行 55 歳定年により退行。

平成 8 年 1 月、東洋キャリアサービス設立、代表取締役就任。

平成 12 年 9 月、「なもなも友の会」設立、代表就任。

平成 14 年 2 月、株式会社なもなもキャリアサービス（高齢者専門の人材事業「派遣と職業紹介」）設立、代表取締役就任。

なもなも

2007 年 10 月 29 日 初版第 1 刷発行

2008 年 3 月 31 日 第 2 刷発行

著 者 ——— 寺尾久継

発行者 ——— 田中久雄

発行所 ——— 株式会社かんぼうサービス

発売元 ——— 株式会社かんぼう

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号（〒550-0002）

電話 (06)6443-2171 FAX (06)6443-4940

印刷／製本……モリモト印刷株式会社

©Hisatugu Terao Printed in Japan 2007

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。